
僕と幻想郷と召喚獣 外伝

影月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幻想郷と召喚獣 外伝

【Nコード】

N6091Z

【作者名】

影月

【あらすじ】

僕と幻想郷と召喚獣の過去編です。バカテス欄にありますが、メインは東方で明久しかでません

予告（前書き）

読みにくいかも…

予告

「やあ、また来たね」

「夢？この頃よく見るな…」

「赤い霧、異変ね。面倒ね」

「明久がしたいようすればいい」

「あなたは食べてもいい人間？」

「な、勝手に私の領域に入るな…!!」

「私は門番です。如何なる理由があろうと、許可なく此処は通せません!!」

「…貴方…私の能力が効かないのですか？」

「そう、私が此処の主…レミリア・スカーレットよ」

「お兄さん遊びましょう」

「結界を張ってるから、その子の治療を早く!!」

「お願い、明久!!目を覚まして!!」

「君は絆を力に出来る。それは君を導く光になる」

「もうお姉様なんか…こんな世界なんか大っ嫌い!!」

「それが君達を苦しめる鎖つなだと言っいのなら…」

「僕は、運命きみたちを殺すくってみせる!!…!!」

僕と幻想郷と召喚獣外伝
紅魔館赤い霧編

近日公開！！

「偶然とはいえ『真理の扉』を開けてしまった君は選択に迫られる・
．．でも、私は信じてるよ明久．．．」

予告（後書き）

あるアニメの次回予告見たいに書きました

第1話 紅魔館赤い霧変 始まり（前書き）

時間系列は適当です

第1話 紅魔館赤い霧変 始まり

「……………」

「あら、また来たのね」

声が聞こえる……でも暗くて見えないし、動けない……

「精神体だけとはいえこうも……に何度も来るなんてありえないわよ？」

此処は何処だろうか……聞きたいけど声も出ない

「そうそう、今日貴方は大切な選択にせまられるわ。頑張りなさいね」

そして僕は沈んでいく……

「また……あの夢か……」

声だけが聞こえる夢……だけど夢にしてはものすごくリアルだ……

「大切な選択？」

そう、これは運命の始まりであり、僕こと吉井明久の始まりのお話

僕は中学生開始を4月に控え、休みなので幻想郷に来ていた。

「幻想郷」・・・それは妖怪、人、神、いろいろなモノたちが共に暮らす世界だ

「さて、起き・・・外が赤い？」

外は赤い霧で包まれていた

「おはよう、慧音」

「やあ、おはよう明久」

「これって・・・」

「ああ、外か。多分異変だろうな」

異変・・・ってことはやっぱり霊夢は動くのかな？」

「巫女のことか心配か？」

「え？あ、うん。やっぱり友達だしね・・・」

「気になるなら行ってもかまわないよ」

「え・・・」

「明久がしたいようすればいい」

「慧音・・・」

「た・だ・し！！無事に帰って帰ること。これだけは約束してくれ」
「・・・うん！わかった、行ってくるよ」

僕は慧音宅を飛び出し、博麗神社へと向かった

少年移動中

「霊夢」

「あら？明久来たの？」

「おつ、明久じゃねえか」

「あ、魔理沙もいたんだね」

神社に着くと魔理沙もいた

「霊夢、これってやつぱり・・・」

「ええ、異変ね。面倒よね」

「あはは」

いつもどおりだな

「明久はどうするの？」

「心配だし、ついて行くよ」

「わかったわ」

「でどこ行くんだ？」

「そうね・・・」

霊夢が僕を見てくる

「霊夢の感どおり行けばいいと思うよ」

「それもそうね。なんだかあっちのほうが霧濃いし、あっち行きましょう」

「了解」

「んじゃ、いくぜ」

僕達は出発した

第1話 紅魔館赤い霧変 始まり（後書き）

現時点での明久

霊力と魔力がちよつと使える

空の飛行は浮けるがそこまで飛べない

回避、感、体力に関しては幽香のおかげで高い

能力は曖昧だが意識下であれば干渉が効かないことだけは自覚している

第2話 紅魔館赤い霧変1 闇と？（前書き）

簡単に言おう！！戦いなんてなかった

第2話 紅魔館赤い霧変1 闇と？

僕達は走っていた・・・なぜかというと・・・

「なんで妖精たち襲ってくるんだよ!!」

「この霧のせいで興奮してるんだと思うわ」

「迷惑だな!!」

妖精達が行き成り弾幕を放って来たからだ
相手にしてるところがちが疲れるのでスルーしてたけど・・・

「霊夢！一番密集してるところどこ!？」

「え？えつと右らへんよ」

「魔理沙やるよ!!」

「なるほどね、わかったぜ」

僕と魔理沙は少量の弾幕をそこに投げた

「よし、結構片付いたね」

「考えたわね」

「確かに広範囲に撃つより、密集したところに撃ったほうがあてやすいもんな」

少しあいた所に来ると妖精からの攻撃がやんだ

「・・・あれは・・・」

前方の方から黒い塊がふよふよと飛んできた

「妖怪？」

「多分そうじゃないの？」

そう話していると塊は形を崩し始め金色の髪を肩口まで伸ばし、黒つばい服を着て頭の方には赤いリボンを付けた少女が現れた。

「君は？」

「うーん？私はルーミアだよ」

話せるみたいだね

「ねーねー」

「？なに？」

「あなたは食べてもいい人間？」

いきなり物騒である

「ダメに決まってるでしょ」

たしかに、大丈夫だと答える人間はいない

「えーでもお腹空いたしな・・・」

「・・・あ、じゃあこれ食べる？」

「？なに？」

僕はおにぎりを取りだしルーミアにあげた

「わーい」

（二人とも今のうちに・・・）

（わかったわ）

（了解だぜ）

「まだあ・・・ってあれ？」

ルーミアが気づいたところには僕達は逃げていた

「意外と逃げれたわね・・・」

「追いかける気はなかったみたいだしね」

「でも、さすがに疲れたな・・・」

ずっと走っていたためか足がちょっときつい・・・

「そうだねちょうど湖で見晴らし良いし」

「休憩しましょうか」

僕達は休憩しようと立ち止まると、いきなり氷柱が飛んできた

「おっと」

「勝手に私の土地に入るなッ！！」

そこには氷の羽の妖精が・・・

「あゝチルノか」

「チルノ？」

「あの妖精の名前よ」

「そして自称サイキョーのバカだ」

魔理沙・・・その言い方は・・・

「相手にするのもだるいわね・・・」

「時間がかかりそうだね」

「じゃあ吹き飛ばすか」

「「え？」」

魔理沙の発言に振り向くと・・・ミニ八卦炉を取り出しており・・・

「いくぞ！！」

「え？」

あ、あれは・・・

「恋符「マスタースパーク」！！」

「わにや・・・」

「不意打ちね・・・」

「そうだね・・・」

魔理沙のはなつた極太レーザーはチルノを軽々と飲み込み、吹き飛ばした

「さ、邪魔は居なくなつたし休憩しようぜ」

「「・・・」」

時折この子の行動が恐ろしい・・・

第2話 紅魔館赤い霧変1 闇と？（後書き）

昔、マジでチルノは中ボスかな？と思つてた時期があつた

紅魔館赤い霧変2 門番（前書き）

やっぱり戦闘シーン下手だな・・・

紅魔館赤い霧変2 門番

僕たちは休憩していると

「あややく、ここにいましたか」

空から文が飛んできた

「どうしたのよ、パパラッチ」

「失礼な！私は清く正しい射命丸文ですよ」

「文、どうしたの？」

「あ、明久君もいたんですね。いや、異変について聞こうと神社に向かったのですが、もうお出かけになられて探してたんですよ」

「山は大丈夫なの？」

「警備をしろと言われましたが・・・抜け出してきました（キリッ）
「アハハハハ」

文らしいな

「そういえば・・・文」

「はい、なんでしょうか？」

「どうもこつちが霧が濃いみたいだけどこかあるの？」

「こつちですか？たしか紅魔館ですね」

「紅魔館？」

「吸血鬼の住む館ですよ」

吸血鬼か・・・霧・・・吸血鬼・・・

「なるほど・・・」

「どうかしたの？明久」

「いや、今回の異変の犯人その吸血鬼かもって思ってたね」

「たしかにレミリアさん日光苦手そうですもんね」

「レミリア？」

「レミリア・スカーレット、紅魔館に住む吸血鬼ですよ」

まあ断定できないけど・・・

「紅魔館に向かおう」

「だな」

「では私も取材についていきます」

こうして僕たちは紅魔館へと向かった

side 霊夢

「・・・文」

紅魔館に向かいながら、私は明久にばれないように文に話しかけた

「はい、何でしょうか？霊夢さん」

「あんた明久に結構ペラペラと話してたけどいいの？」

こいつは結構話をはぐらかしたりするのに、明久が質問している時すらすらと事実を話していた。

何を考えているの？こいつは・・・

「別に問題ありませんよ。今さらですし」

「今さら？」

「それでも私は霊夢さんより明久君と付き合い長いんですよ？それに・・・」

たしかにこいつのほうが長いわね・・・

「明久君に対してなぜだか話をはぐらかしたりできないんですよね」

「確かにそうね・・・あの隙間妖怪ですら明久といると胡散臭くないし」

「それは是非とも見てみたいですね」

やめときなさい・・・なんだか世界の終わりを見た気分になるから・・・

慣れたけど

side 明久

妖精からの襲撃を回避しながらも僕たちは紅魔館の前にたどりつくが・・・

「止まりなさい！！」

僕たちの前に赤い髪の子イナ服を着た女性が立ち塞がった

「あの人は・・・」

「彼女は紅美鈴という妖怪ですよ」

「あ、妖怪なんだ」

「はい、そしてここの門番です」

「私たちはこの主に話があるの退いてくれないかしら？」

霊夢が美鈴に話しかけるが

「私は門番です。如何なる理由があろうと、許可なくここは通せません！！」

「どうしても？」

「お嬢様から誰も通すな、と言われていきますので」

多分ここで当たりかな

「仕方ないわね、私が行くわ」

「大丈夫？ 霊夢」

「霊夢さん、彼女は接近戦が得意なのでお気をつけて」

「わかったわ。行ってくる」

こうして霊夢と美鈴の勝負が開始した

「しかし意外だぜ・・・」

「何が？」

「こんなこと起しときながら、ちゃんと弾幕勝負するんだなってな」

「それは確かに。結構浸透したみたいだね」

「烏天狗総勢で広めましたからね」

「うん、あの時は本当にありがとね」

「いえいえ、明久君の頼みですから」

「お、結構面白いことになってるぜ？」

弾幕勝負は、霊夢はある一定で距離を置き、美鈴に関してはどうも遠距離戦は苦手らしく戦況は霊夢に傾いていた

「くっ！彩符「極彩颱風」！！」

どうも押し切られる前に状況を変えようとしてるようだ

彼女から様々な色の弾幕が零れ落ち、雨のように霊夢に降り注いだ

「ちっ」

霊夢もさすがに攻撃しながら避けれないと踏んだのか、弾幕をやめ、回避に専念している

しかし

「甘いわね、夢符「封魔陣」」

霊夢はお札を投げると、札は分裂し美鈴の弾幕をよけながら彼女に殺到する

美鈴はまさかあのタイミングで攻撃が来るとは思ってたかったらしく命中

煙がはれると気絶していた

「さ、進むわよ」

「そうだね」

僕は彼女を壁の近くに寝かせ門をくぐった

紅魔館赤い霧変2 門番（後書き）

ここでの文はそこまでパパラッチじゃない!!多分

紅魔館赤い霧変3 七曜の魔女（前書き）

友「影月！！明久のテーマ曲決めたぞ！！」

影「考えたじゃなくて決めたんだね・・・」

友「深蒼ってやつで聞くか？」

影「いや、持つてるからいい」

友「・・・orz」

サブタイトルは彼女の二つ名です

紅魔館赤い霧変3 七曜の魔女

「赤いね・・・」

僕は紅魔館に入って最初に言ったのはこの一言だった
壁、絨毯すべて真っ赤なのだ

「悪趣味ね・・・」

「吸血鬼だし仕方ないんじゃないか？」

「ところでどこに向かうのですか？」

文の言うとおりだね・・・

「文、レミリアって日光苦手なんだよね？」

「そうですがどうかしましたか？」

「なら・・・日光が来ない地下かな？」

「確かにそうだな」

僕達がそう言っていると

「明久、多分これ地下に行く道よ」

霊夢・・・まあ、行くか

少年少女移動中

そこには……

「……すげ〜」

「確かにすごいわね」

「……図書館？」

大きな図書館が広がっていた

「大量の本ですね」

一般的な本から幽香が言ってた魔道書まで大量にある……

しばらく進むと

「此処に何のようかしら？」

紫の髪の少女がいた

「あんたがレミリア・スカーレット？」

「違うわ。私はパチュリー・ノーレッジ。七曜の魔女と呼ばれているわ」

「じゃあ、レミリア・スカーレットは何処に？」

「彼女ならこの館の主の間にいると思うわ」

あら……予想外れた……

「ごめん……」

「いや普通そう思うから仕方ないぜ」

「じゃあ行きましょう」

僕は来た道を戻ろうとすると

「待ちなさい」

「なに？」

「態々、侵入者をそのまま見逃すと思う？」

確かにそうだよな〜ハア・・・

「よし！！ 相手が魔法使いなら私の出番だな！！」

「魔理沙、大丈夫？」

「おう！！」

そう言うと、魔理沙はパチュリーと相對する。

そして弾幕ごっこが始まった

パチュリーは細かい弾幕を放ちながら、時折太いレーザーを四方向に向けて放つと言う

スタイルを取っている

魔理沙はというと持ち前の速さで弾幕をよけながら直線的な弾幕を撃っていた

「随分とちょこまかと動くわね」

パチュリーは感心した様にそう言う、飛ぶ速さなら多分魔理沙は3人の中で一番早い

「それでもスピードには自信があるんでね」

「でも……これならどうかしら？」

パチュリーはそう言いながらスペルカードを取り出し、

「火金符『セントエルモピラー』」

上下から色の違う弾幕が魔理沙に迫ってきた

「おっと」

魔理沙は弾幕をばら撒くのをやめ、スピードを調整しながら避ける
しかし魔理沙も避けるだけで終わるはずがなく

「ならこつちも、恋符『ノンディレクショナルレーザー』」

無数のレーザーを魔理沙は発射し、そのうち数本がパチュリーに向
かう

「っ!」

パチュリーは回避すると距離を置き

「スピードも攻撃の手数の弾幕の数もある・・・なら、パワーはど
うかしら?」

パチュリーはそう呟き

「日符『ロイヤルフレア』・・・」

スペルカードを発動させる
しかし魔理沙は・・・

「悪いな。私はパワー勝負が一番得意なんだ」

笑ってそう言った

「恋符『マスタースパーク』!!」

魔理沙から極太レーザーが放たれる。

同時に、パチュリーからも炎の玉が発射される。二つの技はぶつかり合い、均衡し合うだけだ

「なっ!?!」

魔理沙のレーザーは少しずつ、パチュリーの火の玉を押していく

「そんな!?!」

「私はパワー勝負が一番得意なんだって。それに・・・」

「後ろには友達がいるんだ!!そんな友達の前で無様に負けれるわけねーだろ!」

魔理沙がそう言い放った瞬間、極太レーザーはパチュリーを呑み込んだ

極太レーザーが晴れると、パチュリーフラフラした様子で降下し、本棚の上に着地すると同時に膝を着いた

「勝ったぜ」

魔理沙は僕達にピースサインをしてきた

こっして、弾幕ごっこの勝者は決まった

紅魔館赤い霧変3 七曜の魔女（後書き）

萃香のところが話数短くなりそう・・・それ以上に弾幕ゲームじやなくなりそうだ

紅魔館赤い霧変4 時を操る少女（前書き）

ある種のフラグ立て

紅魔館赤い霧変4 時を操る少女

「？」

あれ？パチュリーの様子が・・・

「ゲホゲホッ」

するとパチュリーはせき込み始めた・・・
まさか！

「文！！何処か安静に出来るそこ探して！！」

「！？わかりました！」

僕は飛んでパチュリーに近づく

「ヒュー、ヒュー」

やばい、この子過呼吸になってる！！

僕も昔幽香の訓練で過呼吸になったことがあるからどれだけ危険かはわかる

僕は自分の服の袖を破り、それでパチュリーの口元あたりに覆う
自分の吐いた空気を再度吸い込むという行為をさせるためだ
すると少しずつだが呼吸が安定してきた

「えっと、ごめんね？」

僕はパチュリーの胸元の服を緩め呼吸しやすいようにすると

「明久君こっちにソファーが」
「わかった。ありがとう文」

僕は彼女を抱きかかえ飛んだ

数分後

「う．．．ん．．．」
「あ、気づいた？」
「ここは．．．！？／／／／／」
「あ、ごめん。過呼吸になつてたから．．．」
「そう／／／ところで何してるの？」

僕は土下座をしていた

「その．．．服を緩める時にちよつと見ちゃいました！！すいませ
ん！！」
「／／／でも対処のためなんでしょ？それとも下心でもあつたの
かしら？」
「いえ！そんなものではありません！！」
「ならいいわよ」

僕は土下座をやめ

「もう大丈夫？」
「もともと喘息があるからもう慣れたわ」
「そうか。なら行くね？」
「．．．気をつけなさいよ？」

そう言って僕は図書館を出てみんなと合流した

「こつちよ」

僕達は霊夢の感を頼りに走っていた
しかし広いな・・・
そう思っていると

「あら、お客様かしら？」

銀色の髪をした同じ年位のメイドが現れる

「君は？」

「私はこのメイド長をしております十六夜咲夜と申します」

咲夜はそう言ってスカートの端を摘まんでお辞儀をする。

「それで、何の御用かしら？」

「あんたの主人に用があるの」

「お嬢様に？」

「ええ。この紅い霧を止めて貰いにね。ダメだっと言うなら力尽く
になるけど」

霊夢が簡潔に説明した。しかし・・・力尽くって

「成程……」

「で、通してくれるのかしら？」

「無理ね。お嬢様に危害を加える様な輩を通すと思う？」

そう咲夜が言い放つと違和感に包まれた。

咲夜ゆつくりと近づき霊夢にナイフを向ける

しかし霊夢達は動かない。危ない！！

僕はすぐさま霊夢達を抱え離れると

「え……？」

咲夜の驚きの声と共に違和感が消え

「な、明久？」

「ちよつと、明久何してるのよ！／＼」

「あやや／＼なんで私明久君にだっこされているのでしょうか？／＼」

三人がなんか言ってるけれど

「…貴方…私の能力が効かないのですか？」

「やっぱりさっきの違和感は……」

「え？どうということ？」

どうも彼女達は気づいていなかったようだ

「霊夢達、咲夜の相手は僕がするよ」

「大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」

僕は三人を下がらせ前に出る

「・・・お名前をお聞きしても？」

「そう言えば自己紹介してなかったね。明久、吉井明久だよ」

「そうですか・・・なぜ私の能力が効かなかったのか分かりませんが、時は私の手の中にある。負けるわけにはいきません」

「それはこっちもだよ！」

咲夜がナイフをばら撒くと、僕はそれを避けたり、弾幕で弾いた。
幽香・・・君の特訓が役に立ってるよ・・・

「にしても、意外だね」

「何がでしょうか？」

「弾幕ごつこで挑んで来たって言う事がだよ。ナイフにも刺さらないようにコーティングしてるし」

「それはお嬢様の命令よ」

「命令？」

「ええ。侵入者が来たら弾幕ごつこでお相手をしなさいって」

なんで・・・いや考えても仕方ないか

「幻在『クロックコープス』」

スペルカード宣告と共に咲夜がナイフを投げる

するとそれはいきなり数を増やした

くっ、僕の能力は対象に『僕』が入ってなければいけない

ナイフを投げるためだけに時を止めた場合まだ未熟なのか発動しなかった

「避けるだけで、攻撃してこないのですか？」

弾幕で攻撃するも咲夜は自分周りの時を弄っているのか簡単に避けて行く

スペルカード使うべきかな・・・

ちよつと昔のお話

『明久、1つだけ私の技を教えてあげるわ』

『え？幽香の技？』

『そうよ。ちよつと霊力と魔力を明久は持つてみたいだしね』

そう言つて教えてもらつた技・・・

「これで最後です！！幻符『殺人ドール』」

『やり方は簡単よ。魔力を溜めてそれを放つだけ。ただ反動もあるからね？』

僕は右手を霊力で守り魔力を溜める・・・

咲夜は大量のナイフをばら撒き、そのナイフは僕に向かってくる

『名前はね・・・』

魔理沙みたいに綺麗さとかないけど

「魔砲『『マスタースパーク』』！！」

「なっ！！！！？」

右手を砲身とし、膨大な銀の混じつた七色の魔力の砲撃を放つ

それはナイフを吹き飛ばし、咲夜を巻き込んだ

「幽香・・・やっぱこれ威力高すぎでしょ・・・」

確認しに行くと咲夜は気絶していた

「・・・仕方ないな・・・」

僕は咲夜を抱え近くの部屋に行き咲夜を寝かせた

「さ、行こうか」

「まさか明久もあれ打てたんだな」

「腕、大丈夫？」

「大丈夫だよ」

「いやゝいい写真撮れました（砲撃のシーンは自分用と幽香さんに
売りますかね）」

こうして僕は勝利し先に進むのだった

紅魔館赤い霧変4 時を操る少女（後書き）

ちなみに喘息、過呼吸については私もそうなのでそれで書いています
これでは服で代用していますが、紙袋で少し隙間を作って口に覆う、
という対処が一般的です。理由は自分の呼気を再び吸気した結果、
血液中の二酸化炭素濃度が上昇して症状が和らぐという理論がある
からです。

ただし、鑑別診断がない場合は危険な方法であるのでお気をつけて
ください

詳しくはwikiで

ちなみに、マスクで重なってるのは過去幽香が言った言葉と明久の
言葉を重ねてるだけです

紅魔館赤い霧変5 運命を見る少女(前書き)

やっぱり戦闘シーンは書き難し

紅魔館赤い霧変5 運命を見る少女

「ここね・・・」

霊夢が立ち止まるとそこには他とは作りの違う扉

「ここに・・・」

「じゃあ入るわよ」

『ドカツ』

いや、足でドア開けちゃダメでしょ

「あらあら、随分と礼儀知らずな侵入者も居たものね」

「・・・あなたが此処の主かしら？」

「そうよ、私が此処の主…レミリア・スカーレットよ」

そこには大きな椅子に座り、蝙蝠の様な羽を生やし、変わった帽子を被った・・・

「・・・ちっさい・・・」

「その彼方、聞こえてるわよ・・・」

「あ、ごめん」

「ふん・・・え？」

うん？どうしたんだろう・・・

「なんで・・・運命が見れないですって・・・？」

なんか動揺してるけど・・・

「幾つか聞きたい事があるんだけどいい？」

「えっ、か、構わないわ。言ってみなさい」

「まず一つ。何で紅い霧を出したの？」

「私は日光が苦手でね」

「それで紅い霧を出して防いでいると？」

「そ。正解」

「二つ目。何で態々お前の部下達に弾幕ごっこで戦うように命じたのかしら？」

「その方が面白いでしょ？」

「面白い？」

「そ。遊びみたいなもの何だから……」

遊び半分でこの異変か・・・いい迷惑だね・・・

「じゃあ最後に。この紅い霧を今すぐに止める気は？」

「ないわね」

「そう・・・ならブチ飛ばすしかないわね」

「霊夢がこの頃口悪くなつていくよ・・・文・・・」

「あはは、がんばってください、明久君」

「それに・・・」

それに？

「その男の子にも興味あるからね・・・」

「訂正するわ。こいつは私が絶対ぶつ飛ばす・・・」

こうして僕は付いて行けぬまま、弾幕ごっこが開始した・・・

先手を取ったのはレミリアだった
大、中、小の三つの弾幕を纏め放って来た

霊夢はそれを避けながら、隙を見つけては弾幕を飛ばす

「へえー思っていたよりやるわね」

そう言っただけを増やし、スピードを早くする
しかし霊夢ははまだ被弾していない

「ふーむ……なら、これならどうかしら？運命『ミゼラブルフェイト』」

「……………っ……………」

先端が矛になった紅い鎖が何個か現れ、霊夢に向かっていく。
霊夢はそれを避けるも追尾型なのか追いかけてきた

「仕方ないわね、神技『八方鬼縛陣』」

霊夢が札を投げるとそれは霊夢を囲う様に障壁を出し、鎖をはじく
飛ばした

「ふふ、そうでなくちゃね……………」

「……………」

「？明久、どうしたんだぜ？」

「いや……………なんていうか……………いやな予感で言うのかな……………」

「いやな予感ですか？」

「……………うん……………」

僕はこの戦闘が始まった時から嫌な予感が拭えなかった・・・

「お、結構終盤かな？」

魔理沙がそう言う

「神霊『夢想封印』」

「紅符『不夜城レッド』」

二つの弾幕がぶつかり合う。てかあれ弾幕と言えるのか？まあいいや

「くっ！！」

競り負けたのはレミリアだった。よしこれで勝て・・・！？
その時僕は床が揺れたのに気がついた

霊夢達は気づいていない

「この！！神槍『スピア・ザ・グング・・・』」

「霊夢！レミリア！避ける！！」

「「！？」「」

僕の声に驚いたのか二人はそこから飛び退く

するとさっきまで二人がいたところの下の床が、いきなり出てきた
『大剣』によって崩された

「お姉さま、こんな楽しそうなことしてて呼ばないなんてひどいじゃない」

そこには笑う金髪の結晶のような羽をした少女がいた

「フ、フラン・・・」

「あれ？結構人間がいるね」

その少女は僕達に気づき

「あ、さっき声あげたのはお兄さん？」

「・・・そうだけど・・・」

「へ・・・」

「やめなさい！！フラン」

レミリアが叫ぶもその子・・・フランは無視し

「お兄さん遊びましょう」

「!？」

僕は文と魔理沙を弾き飛ばすとフランは大剣を振り下ろしてきた

紅魔館赤い霧変5 運命を見る少女（後書き）

寒すぎてタイピングきつし・・・

紅魔館赤い霧変6 目を覚まして（前書き）

前回のあらすじ

赤い霧の犯人レミリアと会合

霊夢とレミリアが戦う

勝負が決まりかけたところで乱入者が
乱入者は明久に剣を振り下ろした

紅魔館赤い霧変6 目を覚まして

「明久!？」

「明久君!!」

二人が叫んでいる

「へーこれ避けちゃうんだ」

僕は当たるギリギリで大剣を回避していた

「いきなりな挨拶だね。君は？」

僕はいつでも動けるように構える。隙を見せたら負け、これは幽香がよく実践してくれた・・・（遠い目

「？私？あ、フラン、フランドールスカーレットだよ」

「フランか・・・僕は明久だよ」

「明久かーじゃあ・・・」

笑っている・・・けどこれは・・・

「カンタンニコワレナイデネ？」

次の瞬間大量の弾幕がばら撒かれる

「明久!!」

「霊夢来ないで!!」

「でも・・・」

「大丈夫だから」

僕は弾幕を回避していく。

数は多いけど、ばら撒き方が適當すぎる。これなら幽香の訓練のあのほうがきつい

しかし油断はできない。

やり方は適當だが、威力があり得ないのだ。
さつきから壁に大穴開けてるし

「あはは、あきひさ避けるね」

「そりゃあね」

「なら・・・禁忌『レーヴァテイン』」

フランはまた大剣を呼びだし振り下ろしてきた
だが直線的な攻撃ならよければ！！

「これもダメか」禁忌『クランベリートラップ』

先ほどより正確に弾幕が狙ってくる！！

「くそっ！！」

僕はなんとか避けるも数発被弾してしまう

「痛っ！！靈力を込めたのにそれでこれ！？」

左腕がジンジンと響く、これじゃ動かしにくいな・・・

「まだまだだよ」禁弾『過去を刻む時計』

時計の針のような弾幕が、『反時計回り』しながら飛んでくる

「やばっ！！魔砲『マスタースパーク』」

僕は1箇所にも穴を開けそこを通った

「わゝそんな避け方するんだすごいね」

楽しそうに笑うフラン・・・だけどなんで・・・

「秘弾『そして誰もいなくなるか？』」

するとフランが透けだした・・・
な・・・耐久スペル！？

「明久危ない！！」

魔理沙の声に反応してそこを飛び退くと、僕がいた場所に弾幕が通り過ぎた

「魔霊『耐え抜く守り』」

僕は霊力で身体能力を強化し、魔力でオーラのように体を包む。
これで当たったとしてもそれなりに耐えられる・・・
しかし・・・

「へゝもう攻略わかったんだすごいね」

「いや、たまたまなんだけどね」

意外とこれがスペルブレイクの条件らしく、フランは現れた

4人で・・・

「な・・・」

「禁忌『フォーオブアカインド』」

「がんばって」

「今からの」

「弾幕」

「避けてね」

「」「禁弾『スターボウブレイク』！」「」「」

直線的レーザー・・・僕はそれを避ける

一つ、二つ、三つ、四つ・・・しかし・・・此处で僕は気づいてしまった

僕が避けたうち一本が霊夢達に・・・

そのあとは本当に何も考えていなかった・・・僕は脚力を強化し、走って、そして霊夢達の盾になり、その弾幕により『左胸』を貫かれた・・・

「あ、明久・・・？」

ありや・・・ちょっと声が聞こえにくいな・・・
体もとても痛い・・・

「冗談やめてよ、明久。なんであんたが・・・」

みんな驚いてるな・・・でも火事場のクソ力ってのはホントにあるみたいだ。

まさかあの距離を一瞬で詰めれるとは思わなかった・・・

やばい目も開けなくなつて・・・

「お願い、明久！！目を覚まして！！」

頬に当たる温かい雫・・・あゝ泣かしちゃったな・・・

僕はそのまま闇に落ちて行つた・・・

side 魔理沙

「嘘だろ・・・」

明久が・・・死んだ？

な、なんでこいつが・・・

「まだだよ！！」

いけね！！こいつのこと忘れてた！！

フランは一人になり

「禁忌『レーヴァテイン』」

大剣を振り払ってきた

『ガキンッ！！』

しかしその大剣を止めたのは意外な奴だった

「お、お姉さま？」

「レミリア・・・あんた・・・」

それは槍で大剣を止めるレミリアと結界を張り、衝撃が来ないようにしているパチュリーだった

「結界を張ってるから、その子の治療を早く!!」

「でも私治療に関しては・・・」

くそ!! こういう時何もできないなんて

「なら手伝いなさい!! まだ間に合うはずよ!!」

「お、おう!!」

「お姉さま・・・なんで・・・」

「明久には助けられたからね、私は恩は残しときたくないの」

「レミリア・・・」

「それに・・・フラン、やりすぎよ。それにあなたには今日は外出許可は出してないはずよ」

「なんで・・・」

「・・・」

「なんでいつもそう私をの楽しみを邪魔をするの!!」

「フラン・・・」

「もうヤダ・・・」

!? 雰囲気・・・変わった?

「もうお姉様なんか...こんな世界なんか大っ嫌い!!」

「すべて・・・」

「スベテコワレチャエ!!!!!!」

「パチエ、明久の治療、頼んだわよ」

「任せなさい、レミイ」

「霊夢」

「何かしら？」

レミリアは泣きやんだ霊夢に話しかけた

「ああなると一人じゃ対処にくいだよ。手伝ってくれないかしら？」

「いいわよ。とりあえず一発は殴らないと気が済まないから・・・」

霊夢が・・・黒い・・・

「すいません遅れ・・・なんですかこの状況」

「咲夜すぐに包帯とか持ってきて!!」

「え?・・・!!わかりました!!至急に!!」

お願いだ!!間に合ってくれよ、明久!!

side 明久

ここは・・・どこ?

「あら？また来たのね」

この声は聞き覚えがある
僕は目を開いた・・・そこには

「へー今日はちゃんと『意識』まである状態で来たんだね」

金髪銀眼の少女と

「はじめまして、あといらっしやい」
『へー』

巨大な『扉』が、あつた

紅魔館赤い霧変6 目を覚まして（後書き）

まさかの明久瀕死・・・え？そんなの想像ついた？
わかりやすくすみません・・・

紅魔館赤い霧変7 『』と真理の扉（前書き）

そついや明久は左利きですが右も使えるからあれは両利きになるのかな？

紅魔館赤い霧変7 『と真理の扉

side 魔理沙

私はパチュリーを手伝いながら思った

「あの二人すげーな・・・」

レミリアと霊夢はまた4人になったフランをと対等にやり合い、ましてやそのうち二人を倒していた。

「魔理沙、魔力を送ってちょうだい」

「ああ、わかつ・・・！！」

その時気づいた。まさかの流れ弾がこっちに来てるのだ

「やば・・・」

『バシンッ！』

しかし流れ弾はこっちまで来なかった

「流れ弾は気にしないで、明久の治療をすすめなさい」

「え・・・文？」

文が突風を起こし弾幕を消しているのだ

「お前、口調が・・・」

「それよりも早く。こっちは・・・怒りを抑えるので必死なんです

から・・・」

文を見ると腕を強く握りしめていた
さつきから黙っていたのは怒りを抑えるためか・・・

「パチユリー様、新しいガーゼです」

私も今やるべきことをしなきゃ！！

side 明久

「えつとここは・・・」

白い空間、ホント何もないあの扉以外

「ここは『 』。すべての始まりにして終わりを記す場所」

「『 』？」

「そう。でも珍しいのよ？ここに来ようとする人とかはいるけど、
無意識にこことつながる人間なんていないんだから」

「それってもしかして・・・」

「そ。あれは夢であって夢じゃない。現に君は異能に目覚めてるで
しょ？」

「この能力か・・・」

止まった時を移動出来たりできるこの能力・・・

「そう君達で言う『あらゆる状況下で我を貫く程度の能力』・・・
此処に繋がりが続けたことによって君が覚えたもう一つの能力」
「もう一つ？え、これだけじゃないの？」

「それはここに来たことによって覚えてるのよ？もう一つはあなた本来の能力よ」

「僕本来の・・・あ、そうだ！！此処からどうやって出るの！？」

時間はあまりないんだ

「さあ？でもどうして？」

「僕は戻らなきゃ・・・みんなを助けるために・・・フランを助けるために・・・」

「なんで？彼女は君を殺そうとしたんだよ？」

「あの子は・・・笑いながら心で泣いてた・・・」

そう、あのとき感じた違和感。それは悲しみだ・・・

「だから戻らないと・・・」

ホントにここには何にもない。あるとしたら・・・

「・・・・・・・・つ・・・・・・・・！！！！」

この扉だ！！

「無理だよ、その扉は神ですら開けれない。人間の君が開けれるわけない」

あの子はそう言うてくるけど関係ない

「僕は戻るんだ！！霊夢達があそこで待っている！！」

霊夢や魔理沙だけじゃない！！あそこには慧音や幽香、妹紅達もい

る!!

「それに僕はあの子達とこれからも関わりたい!!」

紅魔館の人たち、確かに事件を起こしたけど悪い人たちじゃなかった

「そして・・・僕はあんなに悲しそうな子たちを見捨てなんてできない!!」

フランが出てきたとき一瞬悲しそうにうつむいたレミリア

笑いながらも悲しそうにしていたフラン

「神でも開けない?人間だからなおさら無理?そんなもん・・・」

『ギギギギ・・・ギギッ・・・』

「え・・・?」

「そんなもん関係あるかああああ!!!!」

『ギギギギ・・・』

少しずつ、本当に少しずつだが扉は開きだした

「う、嘘・・・今まで此処に来る者は確かにいたけど・・・この扉を開けるなんて・・・」

少女の驚いた声が聞こえる

「あは・・・アハハハハハハ」
「え？」

いきなり笑いだしてどうしたんだ？

「まさか、想いだけでこの扉を開けるなんて・・・神々が聞いたら
発狂するよ！！」

「え？え？」

「明久そこは帰り道ではないよ」

「ええええええ！！！」

そんな！！今までの努力は何だったのさ・・・

「それは『真理の扉』。『』の中枢にして創造神の部屋」
「創造神？」

「この世界、神々、命、お話、それらすべてを作りだした神だよ。
絶対神とも言う」

「へ」

「いや、へって・・・明久・・・」

「なに？」

神妙な表情で彼女は話しかけてきた

「その扉を開いた以上、君は人を、神を超えた物を手に入れるはず
だ・・・それは要するに人をやめるのとはほぼ同意義。それを君は・・・」

「その力ならみんなを助けれる？」

「え？あ、うん助けれると思うよ」

「そうか・・・ならよかった」

「良かったって・・・人をやめることになるかもしれないんだよ！？」

なんでって・・・

「その力ならみんなを守れるかもしれないんでしょう？ならここにとどまってても意味ないよ。」

それに誰が何と言おうと僕は僕がそう思う限り人間だ」

「・・・」

「その力によつて周りが不幸になるならそれを僕は止める。でも死ぬ気なんてさらさらないよ」

「なんで？」

「だって、僕が道を外したとしてもそれを戻してくれる友達がいる。だから僕は進み続けるんだ」

「そっか・・・」

さて・・・どうしようかな・・・

「願うといいよ帰りたいと」

「願う？わかった。君はどうするの？」

「私はここで君が作るお話を見ていることにするよ」

「そうか・・・」

「明久・・・」

「なに？」

「君は絆を力に出来る。それは君を導く光になる・・・友達を大切にね？」

「うん。またね」

「うん」

僕はそのまま意識光に手を伸ばした

s i d e ? ? ? ? ?

「またね．．．か」

此処にたどり着くだけでも奇跡だつて言うのにこの扉を開くなんて．

．．
それにあの力は．．

「偶然とは言え『真理の扉』を開けてしまった君は選択に迫られる．
．．でも、私は信じてるよ明久．．．」

君ならその力を使いこなし、いつかこの扉を完璧に開くつてね

s i d e 明久

「う．．．ん．．．」

「明久！！！！」

「え？まだ術終わってないのに．．．．」

魔理沙とパチュリーの声が聞こえる

「あ痛たた．．．．」

「いや、心臓あたり貫かれたんだから痛いじゃ済まないでしょ」

「あ、咲夜？」

視界は線と点が見える．．．でもこれがなんなのかすぐに理解できた

「咲夜・・・」

「何かしら？」

「ナイフ貸してくれない？」

「え・・・はい」

僕はナイフを受け取ると僕はフラン達のところへ歩きだした

「あ、明久！？」

「行くんですか？明久君」

「うん、あの子たちのためにもね」

「わかりました」

「文?!」

僕は歩いて行くと

「「あ、明久!?!」」

「オニイチャン？」

レミリアまで驚いてるよ

「レミリア、霊夢下がって」

「な、何言ってるの!?!」

「どうする気？明久」

「お願い、僕に任せて」

「・・・わかったわ。行くわよレミリア」

「え、でも・・・」

「明久に任しとけば大丈夫よ」

「・・・わかったわ・・・フランを・・・」

「大丈夫だよ」

僕はそう言って二人を下がらせた

「オニイチャン・・・」

「ごめんね」

「エ？」

「いや、遊んでたのに途中で抜けちゃって」

「アソ・・・遊んデクレるの？」

「うん！さあ、来い！！」

「・・・うん！！禁忌『レーヴァテイン』！」

さっきまでなら避けてただろう・・・

しかしもう避けない！！

僕は太剣に向かってナイフを振る

『キンツ、バキツ』

「」「」「え？」「」「」

僕のナイフは太剣を切り裂いていた

「・・・すごい・・・」

「さあ・・・フラン第二回戦だ！！」

僕の眼は爛々と蒼く輝いていた

紅魔館赤い霧変7 『』と真理の扉（後書き）

やべえ・・・読み返したけど恥ずかしいわ・・・

紅魔館赤い霧変8 約束（前書き）

明久VSフラン2回戦

紅魔館赤い霧変8 約束

「行くよフラン!!」

「ウン、禁弾『スターボウブレイク』!!」

一直線に僕に向かってくるレーザー
僕はレーザーに見える線を切り裂いた。するとレーザーは僕を中心に半分になる

「禁忌『フォーオブアカインド』!」

さてまだまだ!!

side 霊夢

「やっぱり心配だぜ・・・」

「任せろって言ったんだから任せときなさい」

「でも妹様は本気ですよ?」

向こうには4人のフランと乱闘する明久

「まあ明久君なら大丈夫でしょう」

「どういう意味?」

「確かにパチュリーの言うとおりだな。どういう意味だ?」

「なんせ彼の面倒を見ているのはこの幻想郷でも屈指の妖怪ですよ?」

「え・・・何を言って・・・」

「いや、文の言ってることも間違っていないわ」

「なんでそう言えるのかしら？」

だつて・・・

「明久から妖力の残滓を感じるもの」

「なるほどね・・・それでも貴女達の信用はおかしいと思うわよ？」

「そうでもないわよ。彼は紫ですらまともに近い状態にさせるほどの人間よ？」

「え・・・あれをか？」

「・・・ええ」

それ以上に・・・

「あいつは・・・何かを助けようって時が一番強いもの」

頑張つてね明久

side 明久

「「いくよ!!」「」」

なんとか一人削ったけどきついな・・・そうだ・・・
僕は少し動きを変えた・・・

「禁弾『スターボウブレイク』」

「禁忌『恋の迷路』」

「禁弾『過去を刻む時計』」

よし、出来た!!

「魔砲『マスタースパーク』」

僕の砲撃と弾幕はぶつかり合い視界が曇る

「こ、これは・・・」

「ミエナイ」

「ドコ？」

「此処だよ」

「「「え？」」「」」

僕が動きを変えた理由それは二人が並ぶように立つようになるため
！！

僕はレーザー状に弾幕を撃つとそれは二人を貫いた

「スゴイネ、おにいちゃん。ならこれは？」

「え？」

「きゅっとして」

「！？」

フランが右手をかざした瞬間僕は瓦礫に隠れた

「ドカーン」

『ドゴッ！！』

「な・・・」

「これもヨケチャウンダネ」

「すごい能力だね」

でも・・・

「視えた・・・」

「え？」

僕はフランの前に立った

「な、明久何してるの！！フランの能力は・・・」

「大丈夫だよ、レミリア」

「オニいさん？アタツチャウヨ？」

「大丈夫だよ」

「なら・・・」

フランは能力を発動するが

『キーンッ』

「・・・え？」

「フランの能力が・・・」

「効いてない？」

「ドウシテ？」

どうしてって・・・

「簡単だよ、能力を発動する前に殺しただけさ」

「コロシタ？」

「そう」

この眼は『殺す』ということに特化している。それは生物や物体に限らず、能力にも干渉するみたいだ

「ねえ、フラン」

「ナニ？」

「これが終わったらさ、一緒に外に遊びに行こうよ」

「え？」

「そしてみんなと・・・お姉さんと一緒に遊ぼう？」

「・・・無理だよ・・・」

フランが泣きそうになりながらつぶやいた

「無理だよ、ワタシコンなんだからみんなを壊そうとしちゃう・・・」

「無理じゃないよ」

「でも・・・」

「もしもそうになったら僕が止めてあげる」

「え？」

「だって友達だもん。助け合うのは当たり前でしょ？」

「・・・・・・」

「さあ、僕もさすがに疲れて来たからねとりあえず・・・これがラ

ストだ・・・」

「・・・うん」

お願いだ・・・本当にこの眼が何でも殺せるというのなら・・・

「行くよ。QED『495年の波紋』！」

「うわ・・・」

周りを覆い尽くす弾幕の雨・・・でも

「進む!!」

僕は避け、斬り払いながら時折被弾しながらそれでも前に進む

彼女達を縛る根源を教えてくれ・・・

斬り払いながらも僕はフランを視続ける

その狂気を!!

見ろ、視ろ、ミロ!!

その時、僕ははっきりと見えだした。

左胸の点の下の禍々しく光る輝きを・・・確証はない・・・でも核心はあった。

「視えた・・・」

殺し切ってはだめだ・・・

「・・・虹色?・・・」

「フラン・・・」

僕は弾幕の雨を突き抜け、フランの前に出る

「それが・・・君達を苦しめる鎖つんめいというのならば・・・」
「・・・」

僕は君の・・・君達のために・・・

「僕は、運命きみたちを殺すくつてみせる！！！！」
「……うん！」

そして僕は彼女の胸に……ナイフを突き立てた

紅魔館赤い霧変 8 約束（後書き）

次回

紅魔館赤い霧変 その後

紅魔館赤い霧変 その後（前書き）

赤い霧変最終話です

紅魔館赤い霧変 その後

僕はただ今妹紅と慧音に説教を受けております・・・
しかないと思う・・・死にかけたりしたしね・・・

「聞いてるのか!」

でも・・・一番つらいのは・・・二人が泣いていることだ・・・

「ホントに・・・ごめん」

「お願いだ・・・こんなことやらないでくれ・・・」

「・・・それは・・・約束できないかも・・・」

「なら・・・死なないでくれ。これだけでも守ってくれるなら、私はいい」

「妹紅!」

「だって、明久もそんなに子供じゃないんだ・・・」

「・・・そうだな・・・私からも妹紅と同じだ」

「うん、それは絶対を守るよ」

やっぱり僕はいい家族を持ったと思う（義理みたいなもんだけど）

時間は飛んでただ今宴会中

「はあ、本当にどうなるかと思ったわよ。いきなり貴方はフランを刺すんだもの」

「あははは・・・」

「まあ、そのおかげであの子も・・・」

結果から言おう

僕はフランを刺したが彼女は死ななかった。

しかし変わったことがあり、レミリアいわく、フランの狂気に飲みこまれる運命が視えなくなったそうだった。

そう、あの時突いた点は、フランの過剰な狂気だったというわけだ

「本当にありがとう」

「どういたしまして」

「あきひさ」

向こうからフランが走ってくる、今度からこうやって外にも出れるそうだった。

だけでもまだ手加減の練習とかいるらしいけどね

「あきひさ」

「何フラン？」

フランは僕の膝に座っていた。妹がいたらこんな感じなのかな？

「ありがとね」

その言葉の後、頬に柔らかい感触が・・・え？

「な！？こら！！フラン！！」

「あははは、お姉さまが怒った」

「はあ・・・」

「ため息つくとき幸せ逃げるわよ？」

「言わないで紫」

今更彼女がいきなり現れようと驚かん！！

「で、どうするの？」

「2、3日したら学校の準備しなきゃだから戻るよ」

「そう・・・」

「たまには来るさ、此処は第二の故郷なんだから」

「ふふ、ありがとうね」

僕は追いかけてこする二人を見ながら微笑むのであった

おまけ

宴会翌日の朝

「・・・・・・・・・・」

周りは僕に抱きつく少女達・・・

「どうしてこうなった・・・」

帰宅後次の日もやっぱり同じだった

そして

「私にそのこと黙ってるなんて覚悟はいいわね？」（ニコッ）

「すいませんでした」（土下座）

幽香に怒られたのは予想道理だった

紅魔館赤い霧変 その後（後書き）

次回

ただ今工作中

東方妖々夢終わらない冬変 予告（前書き）

それは5月過ぎたころ・・・

今だ幻想郷は冬だった・・・

明久達はこれを解決するために新しく咲夜を迎え、異変解決に乗り込むのだった

東方妖々夢終わらない冬変 予告

「5月になったのにまだ冬だなんて・・・」

「春妖精が来ないわね」

「お嬢様から明久を手伝ってきなさいって言われてね。まあ、私個人としても手伝うけど」

「そこら辺をプラプラと飛んでいたらあんた達を見つけてね。ちょっかい掛けてやろうと思ったのよ」

「私の名はレティ・ホワイトロック。冬の妖怪よ」

「あつ明久様、お久しぶりです」

「あら、解ってないわね。弾幕はブレインよ」

「春ですよー！！！！！！」

「私達はこれから冥界に行って今度行っコンサートの練習をするからよ」

「妖怪が鍛えしこの楼観剣に……断てぬものなど、あんまりない！
！……！」

「この西行妖が満開になれば封印されている存在が解放たれるらしいのよ」

「うそ……なんで封印が……」

「私はただ……この力が……いやだった……」

「それも含めて貴女を作ってるんだ！！それを否定してどうする！！」

「明久さん！！受け取ってください！！」

「お前の死を操る力と僕の殺す力。どっちが強いかはつきりさせてやる！！」

「これが……」

「モノを殺すっていうことだ!!」

東方妖々夢終わらない冬変

「僕は絶対に貴女を死なせやしない!!」

東方妖々夢終わらない冬変 予告（後書き）

予告です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6091z/>

僕と幻想郷と召喚獣 外伝

2011年12月25日22時58分発行